

『滴天髓』 通神論の「才徳」

『滴天髓』は、一三〇〇年代の元代末から明代初期に活躍した劉基（劉伯温）によって著わされた書といわれていますが、著者が実際に劉基であったかどうかは文献考証的に定かではありません。

ここに掲げた『滴天髓』の原文は、一九三三年（癸酉年）に袁樹珊により撰輯され、袁紹珊により校刊された『滴天髓闡微』を元にしています。また『滴天髓闡微』自体は、一八〇〇年頃、任鐵樵によって著わされた『滴天髓』の評註です。

なお、『滴天髓闡微』には、「衰旺」「中和」「源流」「通関」「干支總論」「何知章」「體用」などの小見出しがつけられています。これらはおそらく『滴天髓』の原文にはなかったもので、任鐵樵氏か袁樹珊氏のいづれかにより追記されたものではないかと思われまます。

また、以下拙解において「原文」と表記してあるものは、『滴天髓』の元の文を指し、「原註」とあるのは、劉基による評註とされているものであり、「任註」は、任鐵樵による評註です。

※原文の下にある通し番号は、『滴天髓闡微』における『滴天髓』原文の掲載順に対応しています。

※◇内は原文の読み下しで、◇内は和訳。解説中の「」内は、漢文の引用、または意識です。

才徳

徳勝才者。局合君子之風。才勝徳者。用顯多能之象。 84

《徳が才に勝るは、局は君子の風に合う。才が徳に勝るは、用は多能の象を顕す。》

※徳⇨徳（トク）…〈名詞〉本性。生まれつきの人柄。／ものに備わった本性／本性の良心を磨き上げたすぐれた人格。／恩恵／利益。もうけ。

※才（ザイ・サイ）…〈名詞〉持ち前の能力。事を成し遂げる力。／持ち前の素質。

※勝（シヨウ）…〈動詞〉力比べに耐え抜いて、相手の上に出る。／たえる。がんばる。〈動詞・形容詞〉まさる。すぐれる。他のものの上に出る。

※局（キョク）…〈名詞〉人のスケールや才能。／細かく分かれた区切り。

※風（フウ）…〈名詞〉かぜ。揺れ動く空気の流れ。／姿や人柄から発して心を動かすもの

※多能（タノウ）…〈名詞〉才能が豊かなこと。多芸・多才であること。否定的な意味合いが伴うこともある。

※清和⇨清和（セイワ）…〈名詞〉世の中が静かで平和なさま。

※主（ス・シュ）…〈名詞〉あるじ。／君主の略／団体や組織のリーダー〈動詞〉その物事を中心として尊ぶ。／つかさどる。中心となって処理する。

※輔（ブ・フ・ホ）：〈動詞〉たすける。そばにひたとくつついて力を添える。〈名詞〉たすけ。そばによりそつたすける人。
※節外生枝（せつがいせいし）：中心的な問題から離れた別の問題を提起し、話を混乱させることを意味する成語。朱熹『晦庵集』に由来する。

※弄（ル・ロウ）：〈動詞〉もてあそぶ。なぶりものにする。言いくるめる。

※弄假成真（ろうかせいしん）：仮を弄び真と成す。嘘から出た真という意味の成語。

※生平（セイ・ヘイ）：ふだん。へいぜい。平素。何もない普通の時。

※了（リョウ）：〈動詞〉おわる。おえる。〈動詞・形容詞〉さとる。はっきりとわかる。〈副詞〉ついに。全く。さっぱり。〈助詞〉完了の意を表わす接尾語。

※貪（トン・タン・ドン）：〈動詞〉欲ばつてものをため込む。欲ばり。

※戀（レン）：〈動詞・形容詞〉恋う。断ち切れずに心が引かれる。いつまでも慕わしく心が乱れるさま。

※私（シ）：〈名詞〉わたくし。自分ひとりのこと。／秘密の事柄。人に隠して内通すること。

※寛（カン）：〈形容詞〉ひろい。ゆるやか。のんびりしているさま。

※宏（オウ・コウ）：〈形容詞〉ひろい。外枠をいっぱい張って、その中がひろくて大きい。がらりとあいている。

※心事（シンジ）：心に思う事柄。

※奸（カン）：〈形容詞・名詞〉よこしま。道理をおかしている。悪事をおかした人。

※僥倖（ギョウコウ）：〈名詞〉どこまでも利益や幸福を求めること。／思いもかけない、身分不相応な幸い。日本語の意味合いとはやや異なるようで、注意が必要。

※大率（タイソツ）：おおかた。だいたい。おおむね。

※亢（コウ）：〈動詞・形容詞〉たかぶる。たかい。頭を高く持ち上げる。傲慢な態度をとる。

※趨（ス・シュ・スウ）：〈動詞〉はしる。おもむく。足早にいく。〈動詞・形容詞〉はやく進めとせき立てる。やつぎばやに。はやい。

※趨利（スウリ）：利益になる方について利を得ようとする。

【解説】

原文では、〈徳が才に勝る〉と〈才が徳に勝る〉を対比させていますが、〈徳〉を人柄・人格のすぐれていること、そして〈才〉を才能・能力の高いことと理解するだけでは、四柱推命との関連を見出すことは不可能です。

〈才〉は通変（生剋名、変通に同じ）の財のことであり、〈徳〉は通変の正官のことであるとし、原文は、財と正官の四柱八字中の作用の優劣を論じているとする解釈も思い付きはしますが、安易に過ぎますし、原文全体を納得の行く形で理解することは難しいため、誤った考えであることに気づかされます。

そもそも〈徳〉と〈才〉には、どのような対比される要素があるのか。この点をまず明確にしなければ、原文は理解できないのではないかと思われまます。

〈徳〉には、「生まれつきの人柄」という意味があると漢和辞典にあります。この表現に大いに違和感を覚えます。人柄は、生まれたその時点からあるはずがなく、成長した後、

社会生活を営む中で形成されるものではないかと。ですから、「徳」は「後天的に獲得した道徳的な素養」と考えるべきではないでしょうか。「才」は、辞典にあるまま「生まれながらの素質」と考えてよいでしょう。このように「徳」と「才」の意味を定義するならば、両者に対比される要素があることとなります。

以上を踏まえて「徳が才に勝る」を意識すると、「道徳、人徳が、その人の才覚を超えたものとなっている」。「才が徳に勝る」は、「才能豊かであることが、道徳、人徳を超えたものとなっている」となるでしょう。

続けて「局は君子の風に合う」。「用は多能の象を顕す」とありますが、ここでの問題は、「君子」と「多能」の解釈にあります。

『論語』では、次のように「君子」に「小人」が対比されています（出典：加地伸行著『論語』・角川文庫）。

子謂子夏曰、女爲君子儒、無爲小人儒。

《子、子夏に謂いて曰く、女、君子儒と爲れ、小人儒と爲る無かれ、と。》

《子》は孔子のことであり、《子夏》は孔子の弟子のひとりです。また通常、「君子」は、為政者、立派な人の意で、「小人」は、人民、つまらない人の意ですが、加地先生の書では、「君子」とは、知識と道徳を兼ね備えた人であり、「小人」は、知識だけ身につけている人と解すべきであると論じられています。また「君子」と「小人」は、為政者と人民ではなく、ともに為政者に属する人のことを指すといわれています。

《多能》については、孔子が自身の生い立ちを述べているところに、以下のような文を見ることが出来ます。

吾少也賤。故多能事。

《吾、少きとき賤し。故に鄙事に多能なり。》

「私は、少年のころ貧しかった。だから、いろいろな雑役をこなすことができるのだ。」孔子は生家が貧しかったため、すべて自身でするしかなく、そのため、どのようなことでもできるようになったという意味です。つまり、「多能」とは、何事もそつなくこなす能力があることといわれています。

以上より、『滴天髓』の原文を意識しまとめますと、以下ようになります。

「道徳・人徳が備わり、生まれながらの素質を超えたものとなっている人こそ、真の教養人と言える。生まれながらの素質が才能・才覚と認められるものとなり、道徳・人徳を備えているかどうかが問題ではなく、異能・異才の相を呈す。」

既述のように、これでは推命との関連が全く不明ですので、さらに原註にどのようなようにわれているのか見てゆくことにします。

次は、「徳が才に勝る」を註している箇所です。

清和平順。主輔得宜。所合者皆正神、所用者皆正氣。不必節外生枝。不必弄假成真。財官喜神。皆足以其生平。不生貪戀之私。度量寛宏。施爲必正。皆君子之風也。

《清和平順にして、主が宜しきを得るを輔け、合う所は皆正しき神にして、用いる所は皆正しき気なり。（そのようであれば）必ずしも節外生枝せず。必ずしも弄假成真せず。財と官は喜神にして、皆その生平を了るもつて足りて、貪恋の私を生さず。度量は寛宏

にして、**施しは必ず正しきを成す**。皆君子の**風なり**。》

右にある**〈主〉**は、推命の用語の**日主**（＝身主・日干）と考えられます。これ以下の文を理解するには、まずこの点を確認しておく必要があるでしょう。

そして**〈徳が才に勝る〉**について、日干にとって有用な作用をもたらすものを**〈正しき神〉**（**〈正しき気〉**）といっています。ただし、**〈正しき神〉**と**〈正しき気〉**とは具体的に何を指すのか、そして両者にはどのような相違があるのか、残念ながら右文だけでは不明です。続けて、**〈徳が才に勝る〉**ための条件が満たされた命（四柱八字と大運）のことがいわれています。

〈節外生枝せず〉とは、議論の途中に、中心的な問題から離れた別の問題を提起するよ
うなことは褒められたものではない、という意味の成語（諺のようなもの）です。〈弄假
成真〉は、嘘から出た真という意味の成語です。いい加減なことを並べ立て、さも真実の
ように語るという意味です。

〈財と官は喜神〉といわれていることを理解するには、少し説明が必要と考えられます。
当時、科挙という登用試験に合格して、政治家か官吏になることが唯一とも言える出世の
道筋であって、その社会情勢を受けて推命では、通変の財と官、特に正財と正官が出世で
きるかどうかを判別する重要な視点として位置づけられました。

つまり、〈財と官は喜神〉とは、財と官が日干に良好な作用を及ぼすものであるなら、出
世の道が保証されているという意味を伴っているのです。

また「貪恋の私」とは、欲情が強く、利己的であり、秘密も多いといった意味です。
ちなみに日本語では自分のことを「私」と言いますが、漢文では「吾」といいます。

続けて〈才が徳に勝る〉に関しては、次のようにいわれています。

財薄而力量足以貪之。官輕而必志必欲求之。混濁被害。主弱輔強。爭合邪神。三四用神。
皆心事奸貪。作事僥倖。皆爲多能之象。

《財薄きは、力量はこれを（日干が）貪るに足り、官軽きは、（日干は）必ず志い、必
ずこれを欲求す。混濁して害を被り、主弱くして強きを輔く。邪神に合いて争い、三、
四の神を用いる。皆心事は奸貪。事を作すに僥倖。皆多能の象を為す。》

最終的な〈皆多能の象を為す〉という結論に至るまでの説明は散々なもので、〈皆心事は
奸貪。事を作すに僥倖。〉「みな内心はよこしまで、財を貪ることのみを考え、一挙一動み
な身分不相応な幸運を求めめるために行動する」とあります。『論語』とは異なり、原註では
〈多能の象〉の意味について否定的な解釈を提示しています。

続けて原註には、次のようにいわれているのですが、その論旨はここまで見てきた論旨
から大きく外れており、同一の作者とは考えられないくらいです。あくまで推測ですが、
以下の註は、『滴天髓』の後の世に、何者かにより加筆されたものではないかと思われま
す。一応次に原註を掲げておきます。

大率陽在內。陰在外。不激不亢者爲德勝才。如丙寅戊辰月日。己卯癸卯年時者是。陽在外。
陰在內。畏勢趨利者。爲才勝德。如己卯己巳月日。丙寅戊寅年時者是。

《大率、陽が内に在り、陰が外に在り、激しからず、亢ぶらずは、徳を為し、才に勝る。
丙寅月戊辰日、己卯年癸卯時の如しがこれ。陽が外に在り、陰が内にあり、勢いを畏れ、

利に趨^{はし}るは、才を為し、徳に勝る。己卯月己巳日、丙寅年戊寅時の如しがこれ。≪
ここでは、次のような具体的な四柱八字を掲げています。

己卯	丙寅
丙寅	己卯
戊辰	己巳
癸卯	戊寅

原註では四柱八字における年と時を〈外〉、月と日を〈内〉とするという、ごく単純な視点から事象を論述していますが、前文からの脈絡もなく、実証的な観点からも全く無意味と言えます。

任註については、次回の更新で採り上げることになります。



最新更新：10・03・13